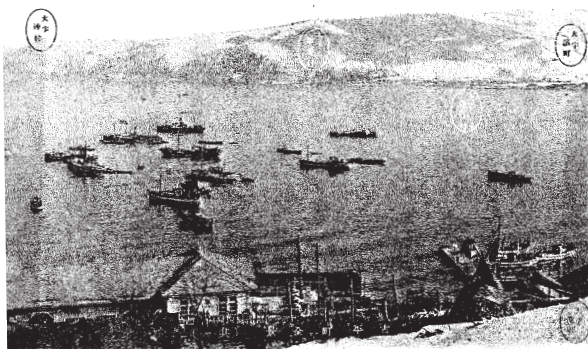


開町138年 古平町



＊和人の住んだ記録

北海道に人が住み始めたのは二万年前といわれているが、後志では黒松内町・倶知安町には、一万六千年から一万年前といわれる遺跡がある。

現在の古平町には、いったいつ頃から和人が住むようになったのだろう。先住民民族であるアイヌの人達の住んでいた遺跡や、生活用品などが各所から見つかっているが、住居跡などまとまった調査はされていない。これは、後の土木工事などで原形が壊されてしまっているからである。

和人については、歴史上の人物としてよく知られている源義経の頃、今から八百年ほど前に、藤原泰衡が源頼朝に攻められ蝦夷が島に逃げようとして殺されたが、このとき、糠部(南部)・津軽から蝦夷が島に逃げた者が多数あったといわれている。

太平洋岸の鶴川から余市周辺にまで逃げて来て、そこに住み着いた者もいたといわれていることから、さらに古平にまで来たのではないかと考えられるが、これには確証がない。

＊『古平』の地名の由来

アイヌ語のフレピラ(赤い崖の意)によるとされているが、ほかにフルピラ(小山の崖の意)クルピラ(模様のある岩石の意)などもある。ではその場所となると、鴨居木辺りから見える古平川中流の右岸、三百メートルほどの崖の一角を指すといわれているが、外にも、丸山がその場所だという説もある。

しかし、一般にはその根拠がやや乏しいといわれている。

空知支庁管内の赤平市は、古平とアイヌ語の語源は同じで、フレ(赤い)を訳して漢字の赤、ピラを漢字に当てはめて平、合わせて赤平としたのである。写真で見ると、確かに古平の地形とよく似たところがある。

＊記録にある『ふるびら』

江戸時代の中頃からフルピラという地名が出ていて、元禄一三年の記録にはフルピラとあり、チョペタン・フルピラ川もある。運上屋がチョペタン川左岸に置かれると、運上屋の所在地をフルピラというようになった。

古平川河口の左岸は以前は砂浜であつたようで、ヲタ子(ネ)コロ(後にハマナカ)といい、フルピラの一部とされた。

安政年間(今から一五〇年ほど前)と思われるフルピラ絵図には、「ハマナカ(ヲタ子コロ)に御役宅四軒、番屋、出稼小屋二八軒、古平川左岸には畑地一三八〇坪、アワ・ムギ・夏野菜などが作られている」と、書かれている。



⇒ 昭和九年頃・古平町全圖写真



＊ 町村合併で古平町

『ふるびら』という地名がついたことから、この地域は古平領とか古平場所と呼ばれていた。

明治二年、それまでの蝦夷地が北海道と改称になり、国・郡が制定されると、同年、江戸時代の場所名から後志国古平郡として、開拓使の直轄（開拓使古平出張所）となる。

北海道や全島の国名・郡名の名称は、何度も蝦夷地の探検や調査をした松浦武四郎の命名による。国と郡は千島（国後・択捉二島、歯舞）を含めて一一か国・八六郡であるが、国は現在の支庁の地域とほぼ同じである。

後志という国名は、後方羊蹄（シリヘシ）に後志の文字を当てて命名され、郡名は次ぎの一七郡であった。

久遠・奥尻・太櫓・瀬棚・島牧・寿都・歌棄・磯谷・岩内・古宇・積丹・美国・古平・余市・忍路・高島・小樽

※ 後方羊蹄 六五九年、阿倍比羅夫が蝦夷国を討ったとき、羊蹄山周辺に軍をおいたという記録がある。そのことから後に羊蹄山・

比羅夫の地名がついた。

後の古平町の区域は古平郡に属し、開拓使直轄 ↓ 札幌本庁（明治五年） ↓ 古平外二郡役所（明治十二年） ↓ 札幌県（明治十五年） ↓ 北海道庁（明治十九年） ↓ 小樽外六郡役所（明治二十二年） ↓ 小樽支庁（明治三十三年） ↓ 後志支庁（明治四十三年）の管轄となり現在に至っている。

明治初年の古平郡の区域は、
沖村・沢江村・歌棄村・浜中村・入船町・新地町・垂美村・群来村であったが、明治二十二年、入船町と新地町を分割して丸山町が新設され、垂美村を湊町、浜中村を浜町と改称した。

明治二十三年、郡内に三か所に戸長役場が置かれたが、明治二十二年にはこれらの戸長役場が統合されて、浜町外四町四力村戸長役場となった。

北海道にも町村制が施行され、明治三十五年、郡内の五町四力村が合併して二級町村古平町となり、四〇年に一級町村となった。

※ 一・二級町村制

北海道と府県では町村制にも格差があり、明治三三年になって、府県の町村制に近づいた一級町村制



が施行された。明治三五年施行の、北海道で多かった二級町村制では町村長は長官が任免し、助役は置かれず、町村会（町村議会）も定員が四十二名と少なく、条例や規則の制定権もなく、強い統制と保護を受けていた。大正二十二年になってその名を指定町村と変えただけで、第二次世界大戦後の改革まで続いていた。

※ 戸長役場

明治五年、これまでの村役人に代わって戸長・副戸長となり、明治二十二年には、道内で二三六町村に戸長役場が置かれた。

これは町村制とは別の特異な自治制で、一・二級町村が全道に普及する大正二十二年まで、町村議会もない戸長役場が各地にあった。

私の生きた時代 私の歩んだ道

昭和十九年十二月でした。突

然、役場から通知が来て、私は勤労女子挺身隊員として徴用されました。十八歳以上の独身の女性達で一緒だったのは確か八人でした。戦争で男の人の手が足りないので工場などで働くのです。道内からの人達が函館で合流して臨時列車で上野駅まで行き、そこから私達は横須賀へ行きま

が流れます。

仕事は旋盤とか溶接、鏡磨きなどといろいろありました。私は仕事の中から「医務部」を希望しました。午前中はけがをした人などの手当ての手伝いをします。

ます。すると何時でも防空頭巾を被って防空壕まで走るのです。楽しみはラジオを聞くことと食事でしたが、主食はコウリヤン（トウキビの仲間でイナキビに似た穀物）でした。

青春のひととき

女子勤労挺身隊員として

中 村 フ ミ

着いところは『海軍工廠』と大きな看板が掛かっている軍需工場でした。その寮に泊まることになりましたが、驚いたりビックリするようなことばかりでした。

翌朝、いよいよ職場へ行くことになりましたが、みんな防空頭巾に紺色のモンペをはいて、それに同じ色の上つばりを着て工場へ向かいました。工場に着くと門の

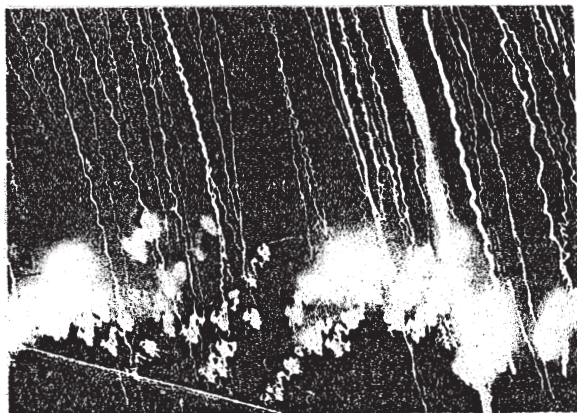
ところで国旗掲揚があり、国旗掲揚が終わるまで軍艦マーチの音楽

午後からは軍医の講習が二時間ほどあつて、それが終わると包帯を洗ったり、洗った包帯を巻いたりして、翌日の支度をしてから帰ります。講習は三ヶ月ほど続きました。

寮に帰り、夜になると毎日のように空襲警報のサイレンが鳴り

う。みんなは手を握り合つて泣きながら見ていました。本当に戦争は怖いものです。

私は結婚することになって、古平町役場から工廠長へ書類が来て、私は徴用が解除になって古平へ帰ることになりました。



敵機が焼夷弾を次々に投下し、その度に家が燃え上がりたちまち火の海になりました。また、上野駅は罹災者でいっぱいでした。ふとんを担いだり、鍋やかまを持つた人達が地下道にもあふれていました。私は寮で作ってきたおにぎりを上げたりして、私は何も食べないで汽車に乗った記憶があります。

こつた返している上野駅からようやく汽車に乗り、連絡船にも

何とか乗ることができて、函館駅からまた満員の汽車にゆられ、余市駅に着いたのは十四日の夜の十二頃時でした。

翌日、余市から定期船に乗り、浜町で保木さんのはしけに乗り移り、沖村まで歩いて帰りました。途中の道路は大変な雪でした。

結婚式は三月でしたが、沖村からの道路は氷と雪崩で通れないので、沢江まで舟で行くことになりました。その途中のことです。

子どものしつけ

高橋 ツル

昔のことですが、学校の先生と巡査は、オツカナイものとして親にも言われてきましたが、今の世の中は、いったいどうなっているのでしょうか。すぐキレルとか言っています。人を人とも思わない人がいます。

海が真つ白くなつて見えたのです。これは鎌の白子で、ちょうど鎌が群来て来たときだったのです。

中村家に着いたら、みんな網を刺す手伝いに出ていて、残ったのは私と中村の家族のほか二、三人だけでした。夫になる中村守は船頭なので、すぐに沖へ出て行つてしまいました。結婚式のご馳走は残った人達で食べてもらいました。

私は今、こんな六十年前にあったことを思い出しています。

私の母は、悪いことをすれば手をつねりました。痛くて泣けば、「痛い、おまえが痛ければ相手はなお痛いのだ」と言いました。

今の親はあまいです。うちの子もだからねえ……。

「我が身をつねつて、人の痛さを知れ」

と、自分が子供の頃はそう教えられてきました。

昔の子供達は厳しく育てられた。時代が違ふと言われればそれまでですが……でも、この頃はあまりにも残酷な事件が多す

戦禍の申をぐぐり抜けて

近 江 愛 子

昭和十八年三月、四国・徳島県から姉の出産手伝いをかねて、あこがれていた満州へ渡ることになりました。チチハルという国境近くの都市に着き、そこである小さな喫茶店から『国境の町』という歌が聞こえてきました。異国の地へ来たことに複雑な思いがし、何となく涙したことが今でも思い出されます。当時、二十三歳でした。ところがそこで、姉の家の隣に住んでいた今の主人と出会い、姉の出産を待たずに縁あつて結婚することになりました。

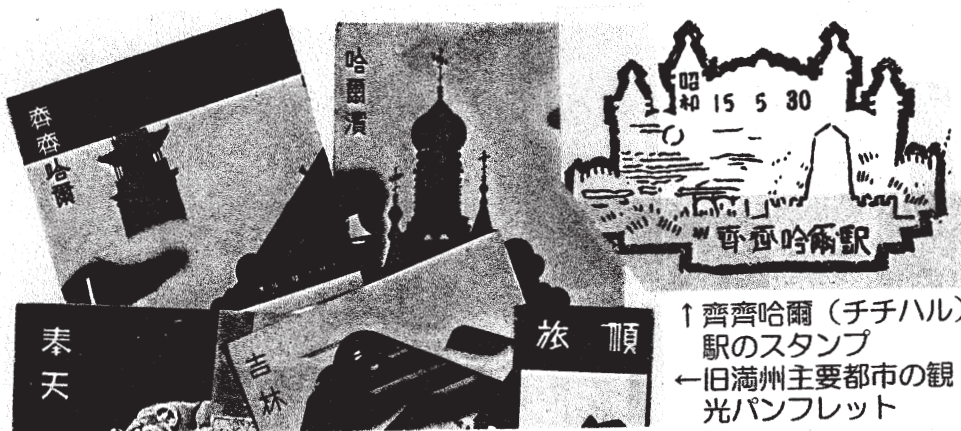
昭和十九年、二十年と二人の…… ◆ ……

ぎます。

今の子供達にも、もう少し人の気持ちを考えることのできる人になつてもらいたい。そう思います。

子供にも恵まれ、束の間の幸せな生活を満州で過ごしました。終戦直後、ソ連軍が参戦して満州に迫ってきました。主人はシベリアに抑留され、私は妹達と共に乳飲み子を抱えて逃げまどうことになりました。まさにドラマの『大地の子』と同じでした。流れ弾の飛び交う中、子供を背負い抱きかかえて歩き回り、満足に食べる物も無く、栄養失調で一歳の息子は私の背中で息絶えてしまいました。まだ誕生日も迎えていない女の子を助けることができませんでした。二人の子供は今でも満州の地で眠っています。命からがら満州を逃げ出して舞鶴に上陸し、ようやくの思いで四国の実家にたどり着きました。そして、父からの「嫁に行ったのだから、主人の帰つて来るのを待

ちなさい」という言葉で、私は、夫の実家である北海道―古平町沖村で、何時帰つて来るかも分らない主人を待つことになりました。



↑ 齊齊哈爾 (チチハル) 駅のスタンプ
← 旧満州主要都市の観光パンフレット

「沖村は、私の郷里である四国とは言葉も、生活もいろいろと違う土地で、慣れるのに大変苦労をしました。しかし、沖村での生活を始めてから二年経った昭和二十二年、抑留生活から解放されて、ようやく主人が帰ってきました。栄養失調で痩せ細り、別人のようでした。それからの生活は貧しさとの戦いの連続だったような気がします。しかし、満州であの弾の中をぐり抜けて来たことを思うと、苦勞も感じませんでした。その苦勞を共にした主人は十八年前に亡くなり、満州での思い出話もできなくなりましたが、中国の残留孤児のニュースなどを見るたびに当時のことが思い出されます。今では孫も六人おりますし、主人が残してくれた畑をつくりながら幸せに暮らしております。ただ、主人と一緒に思い出の満州の地を再び訪れることが出来なかったことが、今となつては唯一の心残りです。



古平のスケツ漁を支えた はずしつ娘

工 藤 フ ヨ

自分の思い出となるとたくさんあるけど、何かひとつと言われれば、働いていた頃のことを印象に残っています。今までのいろいろなところで働いてきたけど、はずし娘が一番大変な仕事でした。十二月になりスケツが掛かると、真夜中に電話が掛かってきて、急いで身支度をし、まだ薄暗いなか家を出ます。浜に着くと網の山がずうっと並んでいて数え切れないほど積まれています。五人くらいが組になり、ガンガンに腰を下ろし作業をします。手も足も冷たいのを通りこしてホデツてくると辛いし、切なくて……それでも私の行ったところは工場があったから、吹雪などの悪天候のときは中ではずしたので、外で作業している人達よりも助かりました。



→ スケツ盛漁期の頃の岸壁の賑わい (昭和四三年)

子供達を育てるために、生活の

我が学び舎

瀧 内 優 子

昭和十二年三月、母と二人で、椋松の並木のある緩やかな坂を登り学校へ行った。どつしりとした門柱『古平町立古平尋常高等小学校』と記してあった。私には漢字は読めないが母から聞いた。「奉安殿には最敬礼をすること。ここには天皇陛下のお写真がある」母は静かに言った。

今日は一日入学、私は子供心に胸は高鳴った。広い運動場、長い廊下、教室の大きなストーブ、驚くことばかりだった。

やがて二階の裁縫室に案内された。隣の作法室には雛壇が飾られて、一、二年生のひな祭りの歌に始まりお遊戯を見せてもらった。お雛様は生まれて初めて、話は姉から聞いていたがこんなに美しいとは、百人一首の読み札にあるお姫様が、この壇に端座しているのかと思うほどだった。アメリカから送られて来たと

いう親善大使の二体の人形、どれもこれもが感動の連続、学校とはなんて素晴らしいところなんだろう。立派な学校に誇りでいっぱいだった。

四月一日入学式、私のランドセルには従兄からいただいた読み方、算術、修身の本、帳面二、三冊、姉が、セメント袋で作った表紙をかけてくれた。姉や兄達には父が名前を書いてくれたのに、私のは姉がペンで書いたもの、私は少々不満であった。

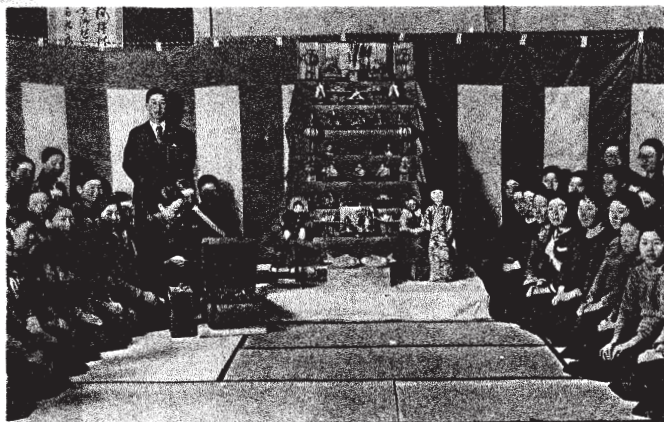
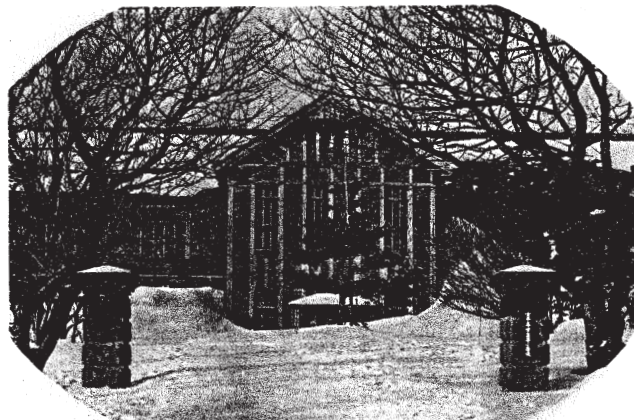
ブリキの筆入れに鉛筆三本、消しゴム、二十の玉がついた算盤、花形のオハジキ、ガリバーの絵のついたクレヨン、九色入りのを買ってもらったときは、虹の色は七色だと聞いていたので、あと二本はどんな色なんだろう？ 姉の帰りが待ち遠しかった。

一年口組、女子の玄関前の廊下に名前が張り出してあった。教

室に入るとアイウエオ順で、「ホリユウコ」は後ろから二番目の席だった。初めはオルガンが何であるか判らず、先生が「白地に赤く日の丸そめて」と歌って、オルガンと憶えた。

運動会になると、中島グラウンドの真中で八幡先生がオルガンを弾き、菅野先生が生徒と共に踊った。今から考えると想像もつかないことばかりだ。

作法室に飾られた雛壇 ↓
← 旧古平小学校校舎正面



私にとって不思議だったのは、算術の時間に黒板にホタルを留めること、三匹のホタルが一匹逃げたら何匹残るか、ホタルがちやんと黒板に留まっているのが不思議でならなかった。

先生がいなくなつて黒板に触つてみると、そこには金網が張つてあつて、それに留まるようになっていたのが判った。毎日毎日が発見の日々であつた。

夏になり日差しが強くなると、

先生が長い竹ざおで白いカーテンを引いてくれる。なんて学校は素晴らしいだろう。

日時の記憶は定かではないが、南京陥落のときだったと思う。旗行列が行なわれ、終ったあとで一年生全員(新地分教場・沖小学校・泥の木分教場)が、本校を背に記念写真を撮った。今に残る

セピア色の写真である。

二階の裁縫室から一望できたモッコ岩、セタカムイ、ローソク岩など、兵隊さんに送る絵は必ずといっていいほどこの場所を描いた。

我が学舎は、私の脳裏に今でも焼きついて離れません。六十九年前の一年生の思い出です。

おとこ石

男 石

おんな石

女 石

池 田 テ ル

昭和の初め頃の話、隣のおばさんは体格も良かったが、子供を叱るときは声も大きかった。ときどき我が家に来ては母に話すニュースも、力を入れて面白く話したので、母の傍で私も聞いていた。

「あのナ、港町の男石女石って二つ並んでいるベサ、あそこには人をだますムジナが出るから気をつけるんだヨ」
私はびっくりして、

「そのムジナをおばさん見たの」と聞いた。

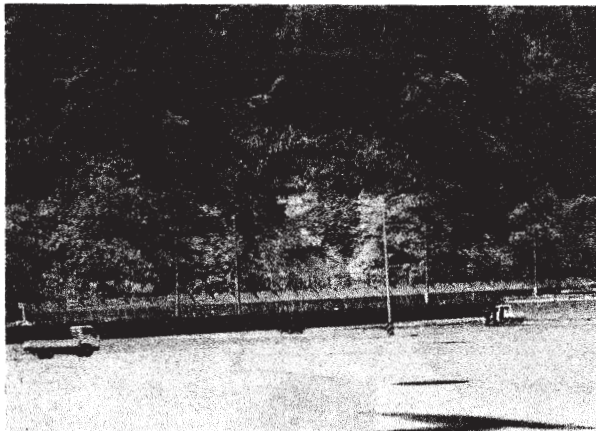
「いいンや、人をだますものは、人には正体を見せねエモンだ。だからあそこは暗くなったら通るでねエ、エエが。」

私は恐ろしくなつて母に身を寄せた。話は続く。

「昨日ナ、新地サ用あつて行つた。ついでに昔仲良しの豆腐屋サ寄つてアブラゲ(油揚げ)買った。久

し振りだから、しゃべくり過ぎて夕方になった。帰る道は港町の一本道で、その途中のがげ(崖)のどごに男石女石があるんだ。」

「おとこ石・おんな石のあつた港町の崖の周辺」



ジナのことだと思つて、勇氣を出して男の声で、『「そうれ食いやがれ!」』で、持つてだアブラゲを放り投げでやったら山は消えて、いつも通る道になった。ムジナの仕業だよ。昔はナア、若い女の人が山へさらわれたこともあつた」

私はムジナとはタヌキのことだと聞いていたが、なんでもキツネがいて、方々で人に悪さをしていたそうである。

やがてお祭りが近づき道路掃除のとき、母が都合悪くて私が初めて大人の仲間入りした。母に言われたとおり、草取り鎌を手にしておばさんの近くにいた。おばさんは仕事が早いし、それとなく指示をすると皆その通りにやり仕事ははかどつた。

ひと休みになり、誰かがおばさんに声をかけ、

「あんたどこの子供何人いる?」するとおばさんは大きな声で笑いながら、「二ダース半」と言つたので、皆大笑いとなった。

その頃はどこの家でも子供は多く、学校が終わると町は子供達に占領され賑やかなものだつた。

姉である私は、幼い子や弟妹の

「だんだんその岩のどごへ来たどぎ、急に、今まで自分が歩いてた道がなくなつて、目の前サ山が現れで通れなくなつたんだ。すぐム

お守り役だった。子育てに忙しかつた母親達はもう今は世にいない。老いて杖に頼る私に、今なお微笑みかけてくれるおばさん。

卒寿に近い私は、昨年の秋遅く娘の運転する車で墓参りをした。

我が家の墓の傍で去り難く、親戚知人の墓に遠く手を合わせていたとき、こちらに向いて、サンダラスをかけた紳士が走るようにして近づいて来た。黒いサングラスを外しながら、

「隣にいたマサです。絹よしまさです」

弟とよく遊んだ由政さんは嬉しそうに私を見ながら、

「男八人兄弟が、私一人残りました。今日は余市にいる一番上の姉の葬儀でした。ついでに親の墓参りに来て、こうして会うことができました」

差しのべられた手を握り、互いの目に何となく涙が光っていました。



心に残る、

『古平小のバザー』

葛 西 庸 三

私は現職の時、四十一年間で十三か町村を歩いた。古平小学校には、昭和五十三年から五十五年までの三年間お世話になった。各地を転々と歩いたが、一番思い出深く忘れ難い街は「古平」だ。

魚が獲れ山菜が豊富で、山系から流れる水が清く美味しい。何よりも重厚な歴史と文化がある。一番いいのは人情だ。気性がさっぱりして、喧嘩をしても後腐れがない。

短い三年間の生活であつたが、あれから二十数年経つた今でも、臉に浮かぶ忘れられない懐かしい光景が幾つもある。

当時八十七歳であつた母が、琴平神社祭典の夜の赤々と燃える天狗の火渡りを、頬を赤く染め喜んで見ていた情景を思い出す。

忘れられないことの二つに、『古平小学校バザー』がある。

「第三十回記念バザー」は、昭和五十五年九月二十八日に開かれた。PTA会長は吉野浩次さんであつた。バザーの数日前、私は吉野会長に同行した。

「おお、いるが。これ学校の先生だ。おめえだのどこ、なに出してける」

「タラコとホッケのいずしにすつかな。いるだけ冷蔵庫から持っただけや」

どこの加工場へ行つてもこの調子なのだ。

短い言葉のやりとりだが、心が交う見事な光景に私はただただ驚き、吉野会長の傍で小さくなりながら、何遍も深く頭を下げ続けた。

帰りの小型トラックは、各加工場から寄付された海産物で満載になった。

同時に多勢の父母が連日学校に集まり、夜を徹して話し合い、分担を決め、数種類のメニューを決め諸準備をする。そして一斉に「食券」を売り歩く。

← バザー風景（昭和二十七年）



は熱い涙が零れ、感動で言葉も出なかった。
 益金は総て子ども達のために還元された。

← バザーの食堂で大活躍のお母さん方、この盛況にご満悦



私は古平を出たあと、他の町村で「古平方式」の実施を模索したが駄目だった。古平の歴史と伝統の重みが他の町村にはなかった。

さて、古平小学校のバザーがいつ頃、どんな事情で始められたのか、という詳細を知ったのは、昭和五十五年八月十二日、文化会館で開かれた『PTA主催・古小バザー三十年の歩みとその様子』という座談会の記録と、たくさんの方から寄せていただいた原稿をもとに「第三十回バザー記念・灯を消さずあれ」を編んだ時だ。これは昭和五十五年九月二十五日発行し、保護者の家庭に配布された。

その冊子の中に「第一回開催」は、「昭和二十五年一月」となっている。

その前年の昭和二十四年五月十日、古平町大火で新地方面が全焼し、町の財政は大逼迫の状態に陥り、校舎の営繕などにはほとんど人と金がまわらなかった。

また戦後間もない時期で、物資は不足し、父母達は生活に追われる日々であった。

だから、バザーを始めた当初の目的は次ぎの三点になっている。

1. 資金を作って校舎の修理営繕費、さらには必要な教材教

具購入の資金にする
 2. 先生方の研修費、図書費の援助をする

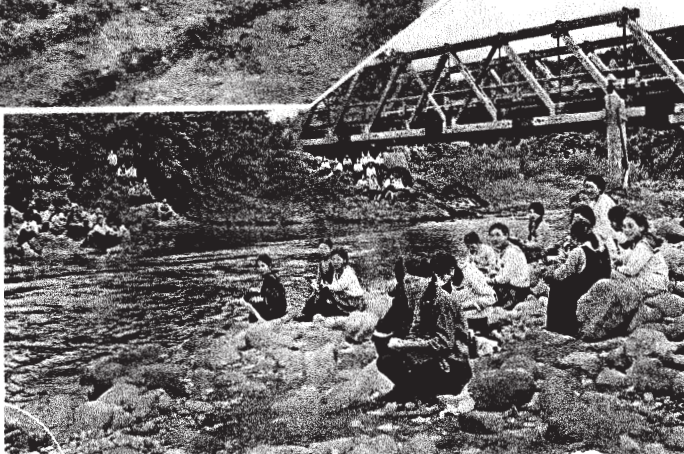
3. 教育への関心を深め、父母の交流を深める

その問題達成のために、バザーは非常に有益な活動が続けた。ちなみに「開校百周年記念」には、積み立てをしていた百万円を寄付した。

昔から「学校」は、地域の人達の熱い思いに支えられ発展してきたが、「古平小バザーの歴史」は、まさに父母と地域と学校が一体になって造りだした歴史に残る事業であり、「食文化の祭典」であった。

心と汗と連帯で続けられた手づくりの『古平小バザー』を、私は決して忘れない。

高等科生徒が廻り刈へ遠足、廻り刈橋はポニートラス式といわれる当時のモダンな構造



第三のふるさと

大 澤 文 子

昭和二十二年四月、私共一家は余市から定期船金華丸に乗り、古平のひととなった。その頃、町長だった舅(ちち)から長男だから……と招きを受けたのだった。余市からの金華丸は小型の定期船、幼子達は終始ぐずり、船酔いのわが身をいとうひまもなかった。

私は新潟に生を受け、教職についていた父の転勤により、新潟から津軽海峡を渡り、「第二のふるさと」札幌のひととなり酔うこともなかったのに……

余市の浜まで見送りに見えていた札幌の母は、「お前たちは離れ小島へ行くんだネエ」と幾度も手を振り泣いていた。

「ごめんネー母さん！ 仕方ないの……」

心の中であやまり私も泣いた。

その時、私は思った。幼子二人を抱えこれからどうなるの……と、心のふるえをかくす事ができなかった。だがいつか広々と果てしなく広がる日本海

の岸壁に佇み、「ここが第三のふるさとになるんだ……」と思つた時、不安な気持ちもうそのように消え、全身に熱いものが流れたのだった。

子供達も日増しに浜の空気にも慣れ、近所の友達と砂浜を跳で駆けめぐり、日焼けして逞しく育っていった。ただ二十二、三年頃の古平にはポンプも水道もなく、沢江村では海際の坂田さん近くに掘り井戸の小屋があり、柄のついたポンプでギーコギーコと水を汲み上げる仕組みになっていた。主婦達は大きなバケツに水を満たし天秤棒で軽々と担いでゆく。私にはできない。天秤棒はガチャンと音をたてて肩からずり落ちてしまう。

「私だけどうして……」

幾度か泣く思いの明け暮れだつた。数年後にはやつとポンプがつき、その何年後にかやつとやつと水道もつき、主婦達の喜びの声が今でも聞こえそう。

その後、三人の子等もそれぞれ

旅立ち、弱かった私も日増しに健康体になった頃、仕事をもつようになった。

昭和三十九年四月には民生委員に任命された。また四十年の春には中学校坂井満先生から短歌会の相談を受けた。早速余市から「海鳴主宰北見恂吉先生」をお招きしてご指導をお受けすることになった。九月二十六日、信用金庫の二階をお借りして決行、北見先生から「岬短歌会」の名称を戴く。

「沢江にも婦人会をつくってほしい」と、役員の男性の方々がわが家に来られたのも四十年の春頃か……

戸惑いもあったが「まあいいか！」持ち前の気性もあり承諾！ ひと部屋にこもり規約、行事、会員募集等々計画し、いよいよ昭和四十年十一月十八日発会式当日となる。伊藤町長様はじめ町役職の方々を招待、伊藤町長より『沢江婦人会』の名称と「書」も戴き感激の一夜を今でも忘れることはない。

その頃であった。三十歳年代の主婦達が「ママさんコーラス」をつくってほしい、と押しかけて来られたのは。音楽大好き

光堂へ直行、楽譜を何点か見当してきた。

指揮者を久保田先生に依頼、『なぎさコーラス』と命名、その頃ママさんコーラスは珍しかったのか、突然、札幌のHBCラジオ放送局より録音隊が来町、小学校の音楽室を借り録音される。

指揮久保田先生、伴奏大澤：と。ラジオ放送は十一月十三日と二十日の予定という事で、十月十日午後より録音に入る。「夕日のなぎさ」「時計台の鐘」「ゆりかご」「北上夜曲」「ほろほろ鳥」「アフトンの流れ」二日分を録音された。

一同緊張気味、でもハーモニが美しいとほめられ、ママさん達に笑顔がもどる。

また翌年には「第十三回道民合唱小樽後志大会」にも出演、指揮足立勇先生、伴奏大澤……と。曲目は「アフトンの流れ」「もみじ」「いずみのほとり」の三曲、存分に歌唱力を発揮し、満足感を見せたママさんコーラスの若かった彼女らを忘れることはない。

そして、あー、私も若かったアー……ひとり言いいペンを描いた。

札幌通信 第40信

『せたかむい』第二百号に寄せて

喜びも悲しみも超えて

吉 川 義 雄

「寝ながら、アメたべないでネ……」
電話のベルに受話器をとると、近く
の布団屋にアルバイトに行っている
娘からの声。

食事どころらしく、周囲から女性
達の明るい笑い声も聞こえてくる。
受話器を置いてから、私の方も一
人で笑い続けていた。

そう言えば、彼女が出かける直
前、長椅子で横になりながらアメ
を喉に引っかけ、ゲエゲエ苦しん
だ私を見て、毒舌を浴びせて出か
けて行ったのだ。

医師に、煙草を止めるように注
意されたとき、あいにく彼女も傍
にいて、それを聞いていたからたま
らない、家にあった喫煙にかかわる
ものは一切排除されてしまった。

私の妻であり、彼女の母が亡くな

つてからまだ五ヶ月。仏壇の横の遺
骨の周囲に、彼女の思いを懸命に
告げる、様々な花々が絶えること
がない。

生きてさえ居れば、夫婦も、親子
も、ケンカもするし、笑い声も響
かせられる。

娘の立場になれば、母を失った後
の父親の姿は、総てに危なくて、頼
りない存在になつてゐるに相違な
い。

もし、その存在さえもなくなつた
ら……と、時にはハラも立つ娘の
叱声なのだが、立場を替えて考え
てみるとうれい声でもある。

煙草をなくして苦しんでいる私に
「これが一番ウマイ」と、ほめたア
メを、娘は絶やすことなくそれを

買つて来ている。

私の今朝の苦しみは、そのアメで
やられたのだから、彼女も同じ苦
しみを味わいながら、職場に出か
けて行ったのだろう。申しわけない
コトをしてしまったが、図らずも
娘の思いを知り、私は泣きたい気分
でいつまでも笑つていた。

五月。間もなく桜も咲くだろう。
雪に悩ませられた北日本に住む
人々も、ようやく心身共に温まる
季節である。

苦勞にさえなまれながら、平成
元年秋から今日まで、『せたかむ
い』は歩みをとめることなく、前史
未到の二百号を達成した。

過去にこれ程の偉業は、町史の中
に見当たらない。

多くの町民が参加して、懸命に原
稿を書くこと自体、至難のことな
のだ。

町史編さん自体が大変な仕事で
あることは、やったことのある私自
身が、骨身にこたえてよく分つてい
る。加えて『せたかむい』編集であ
る。よくぞ二百号まで続けられた
ものと、失礼だが、アキレル程の感
動を申し上げずにはおられない。

『せたかむい』に寄せる原稿は、
各自のいわば『自分史』であり、特
別なものでない限り、郷土・ふるび
らと、自分との関係が色濃く表現
されている。

発表の意志など、つゆ程もなかつ
たはずの高野名さんの日記など、
古平の一時期の姿を私達に伝えて
下さり、大変な歴史書として遺し
て下さっている。感謝の極みだ。

『せたかむい』に寄稿されていた
多くの古平衆も、一人減り、二人
減りして随分少なくなったようだ。
自分のことだけを原稿に写したつ
もりでも、古平の歴史の中に、厳然
と存在を残したことになるのか
ら、これ程スゴイうれしさはない。

編者の優しさに甘えて、編集のギ
リギリまで原稿を送らない自分を
省み、いつまでもアメをなめるのを
止めようと覚悟する。

二百号という前人未到の偉業を
完成した方への、ささやかな感謝の
気持ちでもある。



初めて渡った北海道、東京から、と興味、驚きを東京の友人に書
 遥か辺地の漁村である古平町に 送った手紙が残されている。
 嫁いで来て、大正の一時期、小 当時の町の様子や、生活ぶり
 学校の教員も勤めた梅野モンが、の一面を知ることができる資料
 その見るもの聞くものの珍しさ でもある。

明治末—古平に嫁いで来て 東京の友人への便り

梅 野 モ ン

発信 九月十八日

(明治四十四年)

北海道後志国古平町

梅野清太郎方

梅 野 モ ン

さなきだに(そうでなくてさえ)
 嬉しきこの通信、まして知る人な
 きこの北海の空まで舞い来しかと
 思えば、読みゆく一字一字もい
 と嬉しく、幾度となく繰り返し
 申し候。

さて私も当地に來り候てより
 早や一年有半と相成り申し候。
 さすがはアイヌ住みし蝦夷が島、
 すべての風物が内地とは全然異
 なり居り候。茫々たる荒野は

大半開拓され、山にはエゾマツ、
 落葉松など林をなし(内地の松
 など一本もなし)、里には新しき
 低き家が点々、蔵はすべて石蔵な
 ど、まことに新開地らしく、初め
 て渡りし私は、満州へでも渡りし
 如き感じいたしおり候。いざこれ
 より当地の模様などいささかご
 報知申さん。

鯨漁況

当地にて最も壮快なるは鯨漁
 に候はん。毎年三月中旬より漁
 期に入り申し候。当地ではこの間
 をニシンバと申し候。いよいよニシ
 ンバに入れば人口は倍となり、い
 ろいろ迷信的行事も行なわれ候。
 漁夫はみな着物より股引き、脚

絆、手袋にいたるまで、真紅の毛
 布にて製したるものを用い候。さ
 ていよいよ産卵のため鯨が群をな
 して海岸に近寄せ来る時は、海
 水が白色を呈し候。午後三時と
 いえば、赤き衣に身を包める、筋
 骨たくましき若者は、身を切る
 如き北風をものともせず、舟歌
 おもしろく、櫓(ろ)拍子そろえて
 数千の漁舟たちまち波間に浮か
 び、ついに夜、幾回となくヤッシン
 ヨイサア(アイヌ語)の声もろ共に
 網を起こし、東天のほのぼのと白
 む頃。獲物は水中の大袋に充満
 す。夜の明るるを待ちて海岸に
 運ぶ。海岸はたちまちにして鯨の
 山を築き、折しも旭日静かに照
 らせば、鯨の山は青色か銀色を
 放ち壮絶。筆舌に尽くし難し。し
 かしこれは、ほんのニシン場の初
 期の有様に候。私の来たのは四月
 末、最も盛りの時の有様はまだ
 見ず候。いづれ次回にはなお詳
 しくお知らせ申しべく候。

苹果園(りんごえん)

次は当地にて苹果園の広きこと
 に候。北海道は漁業国と共に、
 また盛んなる農業国にて、開墾
 地の大半は苹果園に候。本年は

例年になき豊作にて、見渡す限
 りの苹果園に累々と実りたる林
 檣の秋が映り、内地の黄金の波
 打つ景色にも劣りまじく候。

この度、皇太子殿下の行幸に際
 し、余市町のある苹果の大農園
 主は殿下の供覧にと、三千円代
 もの紅白の縮緬(ちりめん)にて袋
 を作り(普通ならばみな紙の袋
 を作つてかぶせる。越後の梨の如
 し、林檎に掛けたる由にて候。

アイヌ

我が家の裏手にアイヌの掘立て
 小屋二、三戸有之候。彼等の男
 は顔、手足など毛がいたつて多く
 候。私の知るマカンケイ(アイヌ
 の名)というアイヌは、額に
 如き入れ墨をいたしおり候。この
 アイヌは、マカンケイがもとの
 名前にて、戸籍では古賀竹松に
 て、松前様の命名なりとも言いお
 り候。女は鼻の下、腕、胸などに
 入れ墨いたしおり候。彼等の言
 語は、もはや純然たるアイヌ語に
 ては無之候へ共、一種のアクセン
 ト交じりの言語を使い、こつけい
 にて候。濁音は出でざる由にて候。
 (次回にはアイヌ語お知らせ申す
 べく候)

— 続く —

八月十七日〔晴れ〕
逃避行を続け、八方山へ
到達する ー 続き

時計を見たら五
時少し前だった。
敵前で六時間余り
もグーグー寝てい
たことになる。我
ながらあきれたも
んだ。

古屯の駅の方向
から砲声や銃声が
聞こえてくる。ど
こが八方山の連隊
本部なのか見当も
つかない。ともか
く敵に見つからな
いように森林の中
を歩いていたら、
見慣れた軍道に出
た。

八方山に通じる
道かも知れない。
道の脇にかますに
入った米が山ほど積んである。
腹はへっているが、米は生では
食べられないのであきらめる。
すると林の中から突然、二名

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

〔遺稿〕 春 義 橘 (42)

の初年兵が現れのに驚いた。
聞いたら三中隊だという。その
内の一人の頭に敵弾が食い込ん
でいる。

「大丈夫か」

と聞くと、

「ハイ、大丈夫で
あります」

彼等は一晩中林の
中を逃げ回ってい
たらしい。ぜひ一
緒に連れて行つて
ほしいと言う。

私もこの際、一
人でも多い方が、
敵と遭遇した場合
戦力になるので、
「よし、一緒に行
こう。なんか食べ
るものを持ってな
いか」

「ここに乾パンが
あります食べてく
ださい」

「あのがとう。俺
たちは昨日から何も口に入れて
ないんだ」
五人で一袋の乾パンをむさぼる
ようにして食べた。ふだんなら

乾パンなんか見向きもしないの
に、腹が減っていれば何を食べ
てもうまいものだ。

乾パンを食べたらどうやら元
気も出てきた。しかし、ここで
グスグスしていたら危ない。道
路を歩くのも危険だ。いつ敵と
遭遇するかわからないので、道
路に沿って山を歩くことにし
た。しばらく山中を歩き回って
いたら、他中隊の曹長と上等兵
に会った。話ではその曹長は昨
夜、部下五名を引き連れて、古
屯のソ連陣地に挺身切込をやつ
たが敵に発見されて、それから
は部下とバラバラになつてし
まったらしい。曹長は軍刀を失
い、けん銃一丁だけになつてい
た。上等兵は自分の銃を失い敵
の自動小銃を持っていたが、敵
の投げた手りゅう弾の破片が目
に突き刺さっていた。

私も昨夜からの事の次第を曹
長に話し、一緒に連隊本部まで
連れて行つてほしいと申し入れ
たら、OKとなつて、皆と一緒に
行動をすることになった。
今までは皆が私を頼りにして
いて、いつの間にかリーダー的

な存在になり責任を感じていた
が、今度は曹長が指揮をとって
くれるので、気持ちの上で楽に
なった。

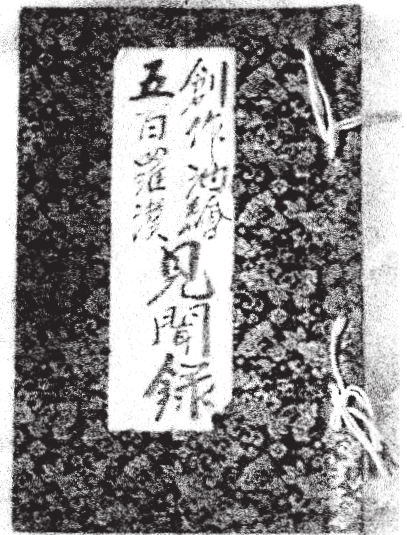
歩いているうちに川のほとり
に出た。神無川か？ 川幅が二
〇メートルぐらいある。この川
を越えて向こう岸に渡ることに
なった。川は底が見えなく深い
ようだ。見通しがよく、渡って
いる途中、もし敵に発見される
ようなことにでもなつたら絶望
だ。誰も先頭を切る者がいな
い。誰も先頭はいやなものだ。
では俺がやるかと、曹長の顔を
見たら、曹長が、

「よし、俺が行く。渡り終つた
らすぐに来い」

と、ザブザブと腰まである水の
中へ入つて行つた。もし敵に発
見されたらどうしようとハラハ
ラして見ていたら、無事向こう
岸に着いた。現金なもので、安
全だとわかると今まで尻込みし
ていた連中が、我先にと川の中
に入り、あつという間に向こう
岸に渡ってしまった。結局、私
が最後に残ってしまった。

ハ 続くV

漢羅五百羅源寺



↑ 【創作油絵五百羅漢見聞録】
羅源寺所蔵

残雪の輝く中で桜も咲きはじめ、いよいよ春本番となりました。この時期から観光を兼ねて羅源寺の五百羅漢を訪ねて来る人も多くなります。

羅源寺の玄関に立つと、永平寺第六十四世大休悟由禪師の肖像と並んで、大小二枚の五百羅漢図が訪れる人を迎えてくれます。制作第一号の記念すべき一枚と、集合人物の構図に苦勞したという五人の羅漢図です。

明るい廊下に掲げられた、魁偉な風貌をもつ羅漢に魅入られるように、一歩足を本堂に踏み入れると、欄間に掲げられた異形の集団の雰囲気は圧倒されます。居並ぶ五百羅漢は見る度に表情

を変え、見る人によつて変幻自在とも言えるのでしょうか。

信仰のある人はこの五百羅漢を拝観し、周囲と隔絶した仏教の世界にひたるようです。

「羅漢というのは人間が修養の果てにたどりついた栄光の姿」とも言われますが、宗教や宗旨に関係なく、この五百羅漢は美術的な価値をも合わせ持つ文化財としても貴重な作品です。

この大小合わせて四八〇枚にも及ぶ五百羅漢は、各地で漁場を営み、道会議員を二期務めた、古平町の名士でもある種田富太郎の寄進により、林竹次郎が大正九年から昭和一四年まで、二〇年間に創作したものです。

五百羅漢図については、由来と完成にいたるまでの経過がいろいろと語られています。そのことを正確に今に伝えているのが、岳轉和尚による『創作油絵五百羅漢見聞録』という、和紙に毛筆で書かれている一冊の記録です。種田富太郎の発願にいたった事情やその心境、五百羅漢図製作にかかわる折衝や、五百羅漢図が完成した後の計画などが、その間のいろいろな経緯が、一二枚の和紙に克明にして、丹念に書き残されています。

← 林竹次郎画伯の肖像写真



五百羅漢についての記述の多くはこの見聞録によるものですが、その外に林竹次郎の家族の談話や、画伯の知人友人などによる

紹介記事などがあります。

また、五百羅漢図の完成したものを札幌から古平の種田家に運んで来て、一時、種田家に保管し、順次羅源寺に運び入れては展示していましたが、それらの作業に関係した人達からの談話も伝えられています。

← 制作第一号「大正九年四月」



五百羅漢にかかわる由来についてのそれらを正確に把握して、資料として残しておくことが大事なことです。

小樽市の曹洞宗宗圓寺の五百羅漢像も有名で、北海道の有形文化財にも指定されています。この木像の五百羅漢は、製作されてから約四〇〇年も経っているのに傷みがひどく、昭和六〇年から修理に取りかかっていたことが、現在は修理も終って一般公開をしております。

短歌

吉平町岬短歌会

雪山よりかんじき履き来し若者が芽吹く猫柳呉れてゆきたり

池田 テル

誘はれて友と語らふ春節句おだいり様はすっかり忘れて

金子 寿子

幼友達ともの送ってくれし桜うどん春色うれし夕べの食卓

坂本 信子

身の丈の積雪のまま二月尽き弥生ついたちも寒き曇り日

鈴木 時子

丘の上に祀る青峯観音さま 春夏秋冬海を見給ふ

竹内 コト

長かりし冬の重さを吹き払ひ広ぐる青空藍色の海

田中 香苗

バス停に卒業式帰りの男生徒赤きチューリップ一輪つつもちて

丹後 初江

積雪が崩れて壁に当る音に目を醒ましたり春の訪れ

寺田 清治

日脚伸び日光和み来野菜種注文せむとカタログひろぐ

東 美知

春に入るも吹く風寒し窓よりの日差しに壺の桜ひらきぬ

堀 典子

俳句

吉平俳句会

春の雪地につくまでの命とも 斉藤波留

種物屋女房小太り子沢山 山口悦子

松島や旅の終りの帰雁かな 越野敏雄

潮引いて磯菜摘む人込み合ひり 大和田絵伊

今朝からは少し派手目の春セーター 高橋重子

積雪の斜面に亀裂見へてをり 仲谷比呂古

雲の嵩一氣に減らす雨強し 室谷弘子

雷神が先に走りて春時雨 外山俊久

春の野に風の運びし瀬音かな 渡辺嘉之

人生の決心ひとつ大試験 堀 典子

夕霞取舵とつて帰港かな 本間寿昭

春雷に微動だに無し神威岬 越野清治

悠

雄詠「五月号」主宰水見壽男

平なる日々の暮しや去年今年 山口悦子
身も筆も老ゆれど坐して賀状かな
雪止みて日差しに目蓋細めけり
女正月紅唇集ひ華やげり
健康を保つ力や去年今年 越野敏雄
漁始旗潮かぜに奮ひ立つ
日本海山河深きに初明り
弾み来てばらばらと散り寒雀
初風や雄冬岬の半ば見ゆ 高橋重子
手を広げあふぐ羊蹄山去年今年
元旦や見慣れし景も新しく
喜寿の冬余る時間を図書館に
男らの訛かじかむ今朝の浜 室谷弘子
初夢や夫が舵取る宇宙船
日当りてゐる廃屋の寒さかな
岬と岬つなぐ潮目に初明り
船頭の風を読み取る漁始
野も山も墨絵のごとし冬景色
降り続き町すつぽりと雪の中 外山俊久

【句評】

海原を眼下に眺め年忘
古稀過ぎて月日が早し年の暮
雪晴や山河に蒼き光あり
滞船の舳先に宿る寒の月
寒月を砕きて雲の流れ行く
切れ間なき雲の厚さや冬灯
初空の一湾澄みし朝かな
はじけたる独楽の旋回しづかなり
一点の寒月天に陣取りぬ
大水柱風吹く向きに向きにけり
海に降る雪たちまちに海となる
初夢や八百万神と酒酌まむ
潮焼けの古老の船に初日の出
越前の水仙届く夕明り
初糶や三本締の声高し
凍空に闇の匂ひのありにけり
凍らずに一つ煌めく星のあり
潜る鴨翔び立つ鴨の船溜り
海猫と海猫空中戦や年暮るる
初風や灯台の風透きとほる
——悠同人集——
灯台を打つ冬波の力溜め
白樺に樹氷の光たわわなる
越野清治
堀典子
【句評】
本間寿昭

怒涛

【10】 古平俳句会
— 五月 —

春潮に凜と浮き立つかもめ島 斉藤波留

山の温泉の春灯星と光り合ふ

収納の衣服あれこれ春めける 山口悦子

ヘリコプター頭上旋回山笑ふ

オホーツク海水河に変わり攻め来る 越野敏雄

雛飾る仕草は妻と重なりて

春光の潮目に乗りて出港す 大和田絵伊

集ふれば話し弾みて日脚延ぶ

木目込みの雛一对の雅やか 高橋重子

春動く海山見とれ車窓より

稜線をま深く見せる雪解風 仲谷比呂古

土やはき野辺にはつぼつ露の莖

湧く雲の春めく色に育ちけり 室谷弘子
母の血をしつかり継ひで春菜つむ

流水や海閉ざされて浜眠る 外山俊久

風花が海を見つめる句碑に降る

乗れる風乗れぬ風あり鳥帰る 渡辺嘉之

潮風と別れて春の風となる

海見ゆるこの山の辺の青き踏む 堀典子

父母の春を掘たる彼岸かな

東風止んで一舟の無き船濶かな 本間寿昭

初鰯夕餉の卓にまだ遠し

海原の光彩を入れ草青む 越野清治

春水の崖より来る迅さかな



冬空と雖どもひたすら蒼ふかし我臥す窓に冴え返りつつ
雪片のとけて目尻をつたひ落つ悔しみの涙ひとに知られず
寒さ戻り視界昏めて吹雪の日を猫柳は苞を脱がむとしつつ

月澄める夜はこころ静もりて我のめぐりの春のことぶれ
春めけば花器に活け置く加工せる塗料をはじき萌え出ず

春のことぶれ

瀧内 優子

俤せは斯くもかそけし紅梅の古木の枝を瓶に活けをり
隤患顯つこころに在りて桃活くる形なかなかとのへ難し
大袈裟に喜びいへぬ性持ちて君の言葉のぬくもりにあつ
大方はおのれ本位にかたむきて自由また権利言ふを聞きをり
美容師のこころのままに切られたる髪は芥となりて掃かるる

▼編集を終えて▲

ようやく? やつと? 二〇〇号
となりました。掲載した項目や執
筆者の詳しい目録は作っていません
が、ざっと四〇名を超える方々の
ご支援や協力がありません。

町史編さん室の仕事を始めて間
もなく、いろいろと集まっているせつ
かくの資料を何とか広く紹介した
いと考えました。

最初に考えたのはごく普通の
小冊子を作ることでした。年間三、
四冊にまとめてみたい。と、だが、
それだとちよつと発行が間延びし
ないか、また製本という作業の増え
るのも難点だし。と、思案してい
たら、『かわら版』という言葉が浮
かんて、「これだ!」と思つてとつて
いたのははじまりでした。

多くの方を対象にして興味や関
心を持つてもらうには、むずかしい
ことよりわかり易いこと、話題も身
近にあるもの、執筆も顔見知りの
方のほうが親近感もあつていいだろ
う。そして、発行の間隔も短い方が
いい、となれば月刊にして、まず取
りあえずやつて見ること。

いよいよ第一号に取りかかりまし
たが、示してずつと継続出来るか

どうかということでした。日記とい
えば、たいがい三日くらいで止める
のが多いというし、雑誌も三号が勝
負のヤマ場だという。

まず第一号の構想ですが、始めは
B4の二つ折、四ページと決め、資
料の紹介と、町内の方からの原稿
を適宜お願いする、ということ出
発しました。

そして、語るまでもなく『せたか
むい』の牽引車は、現在までで四〇
数人を数える執筆陣や、資料をご
提供くださった方々です。ご厚情
とご協力でただただ感謝を申し上
げるのみです。

ところで実際の作業となると、以
前だとお決まりのガリ版でしたが
平成元年ですから、この頃からワ
ープロが利用されるようになり、
その便利さはピタリでした。

それに加えて複写機・輪転機・紙
折り機というまさに三種の神器が
揃っていましたから、作業は難なく
進められました。発行を支えてく
れたこれらの機器は、まさに縁の下
の力持ち、つよい味方でした。

さらにワープロはパソコンに進化し
て、これまで編集の能率と体裁が
整つて、完全に軌道にのせることが
出来ました。これをまた新たな出
発点にしたいと思っております。

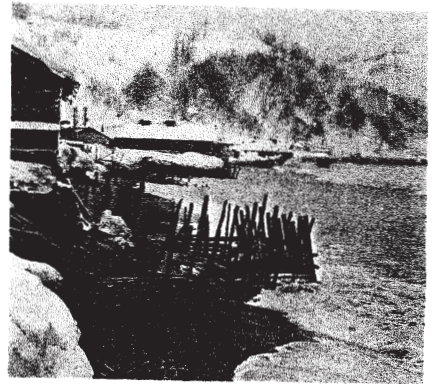
古平町史年表

昭和 20 年 (1945) ~ 続く

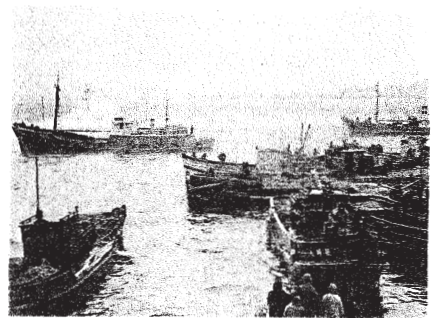
- ▲8月15日正午、戦争終結の詔書が放送され、日本の降伏により第2次世界大戦が終わる
- ▲児童が農家の堆肥用として海藻の採取をする
- ▲児童や町民を対象にラジオ体操講習会が開かれる
- ▲大日本産業報国会ほか戦時に関わった各種団体が解散をする
- ▲有志が、復員軍人感謝の集いを古平国民学校で開く
- ▲進駐して来たアメリカ兵が ㊦ まつや旅館に宿泊すると子供達が珍しがって大勢集まる
- ▲司法保護宣伝のための映画会を役場で開いたが、2日間で3百名余りが入場する
- ▲暴風雪で漁船30隻余りに被害があり、激浪による矢来の破損や倉庫などの流される被害がでる
- ▲鮮魚や魚介類の統制が撤廃される

昭和 21 年 (1946)

- ▲インフレ対策として預貯金を封鎖し、制限内で使用できる新円を発行する
- ▲石狩湾のスケソ漁をめぐる紛争がおきる
- ▲食糧管理強権発動の緊急勅令が出る
- ▲米国からの救援米(7750ト)を積んだ船が小樽に入港(戦後初めて道内への外米輸入)
- ▲戦後初の第22回衆議院議員選挙が行なわれる
- ▲中央バス古平営業所を積丹営業所と改称する
- ▲新地町古盛座が改装され新盛劇場となる
- ▲小樽~古平間直行便として定期船第一正運丸(150トン)が就航する
- ▲中断していた余市~古平間のバスが1日2往復で運行を再開する
- ▲古平町民生委員会が設置され民生委員が委嘱される
- ▲古平国民学校で新憲法発布祝賀式が行なわれ後、児童や町民を交えて旗行列が行なわれる
- ▲古平町長藤田善平が退職し、町長代理に助役松岡秀雄が任命される
- ▲米が四勺増配され、大人1日の配給量が2合5勺(375㍑)となる。タバコは大人1人1日当たり6本が配給される



↑ 海岸の浸食としけで破損した矢来跡(浜町)



↑ 港内に密集して避難する漁船



↑ 「金融緊急措置令」で今までの10円札と新10円札の交換